子供と共につくる授業

校長　小髙　敏男

大泉小学校では、「主体的に学び合う児童の育成」を目指して日々の授業改善を図っています。

「主体的に学ぶ」と一言で言っても、現在の公教育では、子供たちは教師の指示の元に集団で学習する場面が多く、主体的に学ぶ環境になりにくい面があります。また、子供が主体的に、自己判断・自己決定し自己のプランで学習を進めるようにするには、子供たちに自己学習力が身に付いていなければならず、いきなり主体的に学ぶ環境に子供たちを置くことも現実的ではありません。学習の質が保証できず、子供たちの思考力や表現力等を効果的に伸ばすことができなくなるでしょう。さらに、私たち教師自身の問題もあります。私たち教師は、子供の主体的な学びや思考力や表現力の大切さは十分理解しているものの、実際の授業となると従来の授業から脱却することができないでいます。教師は、物心ついたときから自分が受けてきた教育スタイルがしみ込んでおり、そこから抜け出せないでいるからです。自分自身が二十年以上受けてきた教育スタイルを変えることは、なかなか難しいことなのです。

しかし、これからの社会を担う子供たちを育む教育の実現を目指していかなければなりません。その実現を目指す授業改善への取組が本校の研究です。

今までの授業との違いは何か？

その一つは、課題の立て方です。従来は、教師が与えていました。大泉小では、子供が課題を立てる授業づくりをしています。それが、主体的に学ぶ子供の第一歩です。

二つには、子供自身の自力解決から子供同士の対話での集団検討によって課題解決する授業づくりです。未来を切り開く課題解決の力は、教師が教えたのでは伸びません。子供同士で意見交換させることが重要であるのです。教師は、子供自身が課題解決するための最小限度の言葉掛けを目指します。教師は喋らないのがベストですが、喋りたがりの教師が多いのも事実です。子供同士が協力して課題解決する力を伸ばすためには、「教師」という立場ではなく、教師も「仲間」という立場で最小限度の意見を言うことが必要です。従来の教師が喋る授業から子供が喋る授業への転換です。初めのうちは、発言の良し悪しが気になり、子供たちは教師の顔色をうかがいます。教師も自分の思い描いた発言が返ってくると、笑顔になったり「はい・そう」などと肯定してしまったりします。これでは、子供同士の判断に発展しません。教師は、望んでいる発言でも「本当？」「そうなの」とあえて子供たちの思考や判断を揺さぶり、教師の判断ではなく、子供自身の判断の重要性を身に付けさせていかなければなりません。また、発言した子供に対して、聞いている子供たちは、クラスメートとして反応を返すのがマナーです。返さないのは、声を掛けられて無視することと同じだと感じてほしいものです。

三つには、多様な価値付けです。子供の可能性は無限ですが、子供が感じる価値は固定化する傾向にあります。「できること」「高得点をとること」などに子供が価値を感じるのがその例です。しかし、多様な考え方や解決の多様なプロセス、人間性や学び方など、子供の良さは多岐にわたっており、その良さを子供自身が認識できるようにすることが子供の可能性を引き出すために重要なことだと考えます。

大泉小が目指す子供が主体的に学び合う授業は、子供たちだけで学ぶのではなく、教師と子供たちとでより良い授業を目指す「子供と共につくる授業」です。

学校公開などで、そのような授業づくりの一端を見ていただけたらうれしく思います。授業改善に終わりはありません。これからもより良い授業となるように、研究を推進して参ります。これからもご理解とご協力をお願い申し上げます。